

質疑応答

Q1,資料の中の「主訴や状況」にある『虐待サバイバー』と『虐待経験あり』の違いは何？

奥田「『虐待サバイバー』は、面談の中の聞き取りの中で、本人から聞いた事例で、『虐待経験あり』は、過去に虐待されていて今は無いと思われる事案で、線引き等は難しいんですが、過去に虐待受けたと思われる回数だとか、年月とかで判断しています。」

田中「いまどきで言うと『複雑性 PTSD』とかありますが、その当事者が虐待サバイバーとかぶっているという事ですかね。」

Q2,提携校7校の意味を教えてください。

奥田「元々『平野区民が多く行っている高校』という事で、この7校にしています。」

田中「平野区内の高校は、長吉高校、平野高校、東住吉高校、東住吉総合高校。区外が桃谷高校、大阪わかば高校、生野工業高校と。最初は、平野区内の高校だけでやってたんですが、他の高校は流力的に増えた感じで、例えば桃谷高校は出口の所で、桃谷に転学していくとか。

転学というと『ルネサンス高校』や『N 高校』もあるんですが、やっぱり料金的には桃谷高校が入りやすいので出口（支援のつなぎ先）としてありだと。

大阪わかば高校は、旧：勝山高校で新設されてたばかりで『居場所カフェ』も設置されててありがたいなあと。」

Q3,『高校卒業希望』とは何ですか？ 卒業を望まない子もいるんですか？

奥田「高校卒業を望んでいる生徒をカウントしてます。まだ『卒業』とはどういう事かも分からないとかいう事もあるんですが。中には、途中で退学した子もいます。」

田中「『ひらの青春生活応援事業』の一つの意味は、『一つの高校で高校卒業』が一番無難ですが、無理そうなら間を開けずに『転学』を使って、『全日制』が厳しければ、『通信制』でも行って、もらい足りない単位を埋める。ブランクを開けないで卒業してもらうと。

どこどこの高校というより 『高校卒業』を目指すという事に拘る。

それを本人達にも伝えるようにしますね。」

Q4,資料のデータに、学年が4年目5年目とあるのは留年ですか？

奥田「主に単位制の高校でして、学年ではなく高校在籍年でカウントしています。」

Q5,（不登校経験のある辻本さんに対して）不登校から抜け出したきっかけは何ですか？
どんな生活をしてまた何を考えていましたか？

辻本「学生にとっては学校が全てじゃないですか。だから不登校になってしまうと社会から切り離された感覚というのがあって、この先行けなかったらどうしようとか考えていると、ご飯が食べれなかったり、普通の若者らしくなく、お昼起きて明け方寝するという生活だったんで、日中も外に出られないんで、趣味の絵を描いたりする事をしていました。不登校から抜けれたのは行きたい高校があったからです。」

Q6,同世代が同世代を支援するしんどさは何ですか。乗り越えた経験があるから出来るんだと思いますが、乗り越えたきっかけは何ですか？ドーナツトークと出会えたからですか？

辻本『『居場所カフェ』に部活の先輩も来ていた。居場所がなかった時に『行こう』ってなってドーナツトークと出会いました。乗り越えているのかは分かりません。』

Q7,学校との連携が上手くできるコツを教えてください。

田中「まずは校長先生との価値観が合えば上手くいく事が多いが、逆にそこまで踏み込めずうわべの会話だけになったら上手くいかない。会う事も出来ずに終わった事もありました。一般の先生と仲良くなるのはその後です。
先生からの理解がなかった場合、心を込めて繰り返しくりかえし語りかける。」

Q8,高校生事業を何故平野でやろうと思ったのですか？

田中『『淡路プラッツ』というひきこもり支援のNPOがあって、そこで支援をしていたんですが、30代のひきこもり支援をやっていると、結局は最初の所、高校で躓いているのが非常に多い。

という事は、高校中退することがひきこもり防止になるのではと思いました。

平野でしようと思ったわけではなく、平野区でたまたま事業の話があって飛びつきました。平野は歴史も深いですし。」

Q9,子どもの代弁者は大切な事だと思いますが、学校、家庭、利害関係者がいるはずですが調整したい事がありますか？

奥田「すべて言っているのかの配慮も必要だけど、気を付けないと、私自身の言葉になってしまう。純粋な自己決定は生徒にはなく、子ども達の思いを完全には代弁できない。曖昧にはなってしまうが、生徒の思いを尊重しつつ間にある言葉を引き受けていく。」

Q10,行政側としてもっと踏み込みたいのにできないという事がありますか？

小橋「行政（がする事業で）は、制約がたくさんありまして。なので、ドーナツトークさんは、行政が出来ない事をしてもらっている。『行政でも、先生でもない人』に相談できる高校生がうらやましいと思います。

区役所とドーナツトークさんで、月に2回の定例会議を行っているこのような事業は珍しいと思います。定例会議の中で生徒の状況を逐一知れるのはホッとします。」

Q11,カフェや面談にまで来ることの出来ない生徒は、見受けられませんか？

奥田「不登校でも平野の事業では喫茶店で会ったり、生徒には会えずとも保護者さんに会う事も出来るので。」

田中『『保護者面談』もやっていて、母親も辛いので、寄り添いつつ、子どもが言ってほしくない『将来どうすんの』とか『学校行け』とかいう言葉を言わないように、保護者面談で、親に念を押します。それをずっとやっていると家の中の緊張感が段々と和らいでくるんですね。すると『転学』するとかの次のアクションに繋がっていくんですね。』